頭病み手足痛む、温気あるを以てなり、但し身殊に温からず、心中殊に違乱、午後腹苦痛、終日不食、無力又殊に甚だし。」

「同十月二日、

風病連夜発り為ん方なし、仍ち沐浴す。」

「同十月廿九日、

巳時ばかり忽ち振ひ出づ。又小温気あり汗出で、即ち又冱寒此くの如し、度々寒温。」

「同十一月一日、

今日昨日殊に発らず、只咳病猶以て術無きの上、心神窮屈為ん方なし」

この他、「明月記」に記載されている多くの瘧疾の症例について考察を加えて報告した。

ハイステル外科書蘭訳本の扉絵

古川　明

ハイステルの「外科学」Laurens Heister: Chirurgie, 1718 の蘭訳本 Heelkundige Onderwysigen, 1741 は、杉田玄白が「ヘイステルのシュルゼイン」と称したことで有名である。この本には、興味ある扉絵があり、それにはオランダ語の解説文がついている。しかし現在までわが国では、この解説文を翻訳または解説した人はひとりもいないようである。演者はこの扉絵のほぼ中央に、医学の象徴「アスクレピオスの杖」が描かれていることに印象を受け、解説文の翻訳を試みた（扉絵は原著に掲載する予定につき、ここには省略した）。

「扉絵の解説」の概略

扉絵のほぼ中央に描かれている有鬚の人物はギリシャ神話のアポロン神で、彼の頭は月桂冠で飾られている。彼の右手には、「アスクレピオスの杖」が握られ、この杖はアポロンの息子、医神アスクレピオス自身を表現している。絵の上部の楕円形の額には、本書の著者ハイステルの肖像が描かれ、下部の額には、翻訳者ユルホールン（Hendrik Ulhoorn）の肖像が描かれている。解説によれば、ハイステルはこの絵では、アスクレピオスの息子マカオンとして、ユルホールンは同じくポダレイリオスとして、ここに登場したことになっている。ハイステルとユルホールンは、ともに軍医であり、マカオンとポダレイリオスも、トロイア戦争

に従軍したギリシャ軍の軍医だった。そのような意味で、それぞれの肖像が代用されているのである。

扉絵の上部右側には、月桂冠で頭を飾ったアスクレピオスの娘ヒギエイアが描かれ、左側には、ヒギエイアの妹パナケイアがハイステルの額を支えている。解説には、ヒギエイアとパナケイアの名はないが、そのように解釈できる。絵の左下のこどもは「愛」を表現し、その右手には病人をもっとも悩ましたことのない外科器械を握っている。左手には蛇が巻きついた鏡付きの杖を持っているが、これはフランス式アスクレピオスの杖である。絵の最上部では、天使が笛の音を天高らかにひびかせ、アポロン一家の繁栄をいつまでも、ひろく世界に称えている。

VERKLAARING
VEN DE
TITELPRENT.

DE *God der Heelkonft*, en de *Heelkonft* zelf vertoonen
Hier door de Tekenkonft twee van haar echte Zoonen,
Hoogleeraar HEISTER, als *Machaön* wydbefaamd
En fchrandere ULHOORN, recht een *Podalier* genaamd,
Dewyl hy op's Mans fpoor, een langen reeks van jaaren,
De Heelkonft oeffende by Mavors legerfchaaren,
En door zyn iever, en zyn oordeel, geeft en vlyt,
Zich zelf die fchoone Konft geheel heeft toegewyd.
De *Liefde*, een Kindtje houd in de eene hand beflooten,
Het nutte *Werktuig*, dat nooit lyder heeft verdrooten;
Een *Spiegel* en een *Slang* bevat de flinkerhand.
Zy leeren, dat deez' Konft is moeilyk voor't verftand,
En dat voorzichtigheid haar altoos moet beftieren.
De werkzaamheid word door de nyverigfte aller dieren,
De fchrand're *By* verbeeld, en door den fieren *Leeuw*
De wakkerheid, niet bang voor noodeloos gefchreeuw.
Apol, beloonende de daaden zyner Zoonen
En kleener Zoonen, koomt hunn' hoofd met Lauw'ren kroonen,
Als achtend' hen de lof van Hem' hunn' Vader waard,
Terwyl de fchelle Faam hun roem bazuind langs d'Aard'.

L. PALUDANUS.

(Laurens Heister, Hendrik Ulhoorn: Heelkundige Onderwyzigen より)

Verklaaring van de Titelprent「扉絵の解説」の翻訳。オランダ文の解説は詩の形式となっているが、次の通り散文として意訳した。

ここには医学の神(アスクレピオス)と医学そのものが、ハイステル教授を有名なマカオンとして、また有能なユルホールンをまさしくポダレイリオスとして、彼(アスクレピオス)の本当の息子二人の肖像で示されている。彼(ポダレイリオス)は先人(マカオン)を追って、長い年月の間(ユルホールンのように)軍隊で

医術を実践してきたからである。そして彼はその勤勉、判断、思考、努力によって、立派な技術に専心してきた。

愛を表現することもは、片手に病人をちっとも悩ましたことのない便利な器械を握り、左手には、鏡と蛇を持っている。これらはこの技術の理解のむずかしいことと、慎重さが常に必要なことを教えている。彼らの活躍は動物たちの勤勉、すなわち蜂の器用さや不必要なさけびを恐れない誇り高いライオンの活発さで示される。

アポロンは彼の息子と孫の偉業に報いられ、彼らの頭を月桂冠で飾った。彼（アポロン）の賛美と彼らの父（アスクレピオス）の評価に対し、彼らに敬意が払われ、同時にその輝かしい名声は、彼らの栄光をいつまでも、世界中に鳴り知らせ続けている。

この蘭訳本は大槻玄沢の「瘍医新書、寛政四年（一七九二）」として翻訳されたが、扉絵は省略してある。また越呂徳基の「瘍科精選図解、文政三年（一八二〇）」に、牧墨遷の銅版画で、この扉絵が紹介されたが、解説はない。江戸時代の蘭学者には、この扉絵の解説、翻訳は不可能だったと思われるが、明治以降も今日まで、翻訳も解説もした人はいないようである。

この扉絵の解説の作詩者パルダーヌスは本名プルーク Lambertus van den BROEK で、十八世紀初期のオランダの詩人である。絵の制作者ドュ・ブール Louis Fabricius DUBOURG はアムステルダム生まれのフランス系オランダ人で、宗教画家として名高い。彫版者タンニヱ Pieter TANJE は歴史肖像画彫版を得意とした。

なおこの扉絵で、医学の紋章「アスクレピオスの杖」が、はじめて日本に紹介されたらしいが、この紋章の意義はギリシャ神話の普及するまで理解されなかったであろう。明治四十二年創刊の「刀圭新報」の表紙に、アスクレピオスとその杖が描かれているので、当時は理解できたと思う。その表紙の絵はスイスの医史学者ルクレルク Daniel Le Clerc の「医学の歴史」扉絵を採用したものである。